

# PHD LETTER

## 76

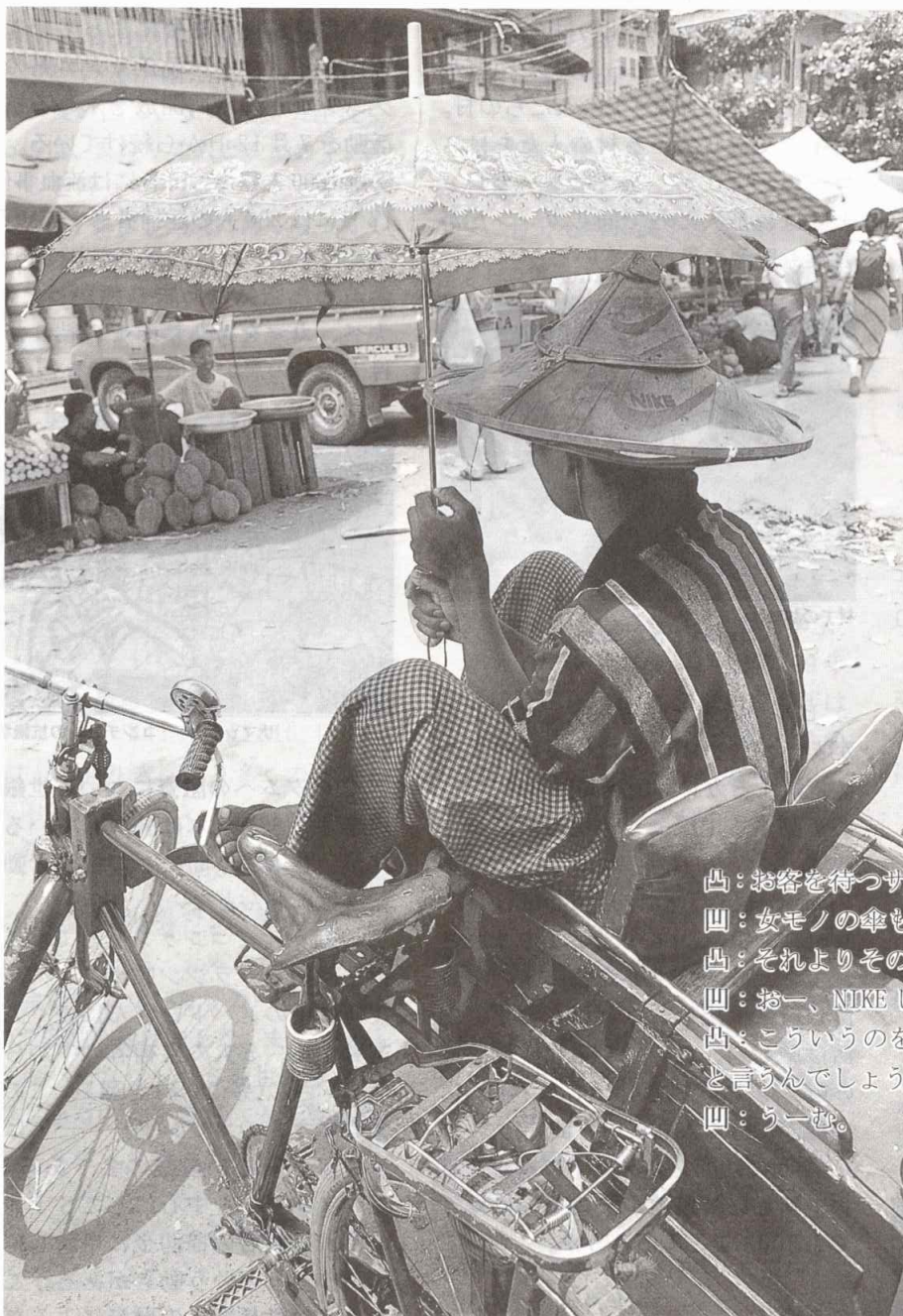
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2000・9

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

●古参職員フジノに聞け	.....	3P
●研修生レポート	.....	4-5P
●ソディ通信 29 “サンプル届きました。”	.....	6P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
 編集人：藤野 達也  
 住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
 元町アーバンライフ202  
 TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
 e-mail：phd@po.hyogo-iic.ne.jp  
 定価：100円



凸：お客を待つサイカリーの運転手も暑そうですね。  
 凹：女モノの傘もチャーミング？  
 凸：それよりその下の笠のロゴマーク、見てよ。  
 凹：おー、NIKE じゃないですか。手書きだけだ。  
 凸：こういうのを THINK GLOBALLY, ACT LOCALLY  
 と言うんでしょうか。  
 凹：うーむ。

ビルマ、マンダレー 撮影：FUJINO.T



東西南北  
問題解決  
取組日記

6月×日

15年ぶりに韓国に出かける。90年から続けている日韓農民交流の評価と今後の方向について協議をするためだ。訪問地は忠清南道洪城。有機農業をすすめるグループ正農会に属する皆さんと話し合う。

アジア・南太平洋地域の村人との交流はお互い違いが大きいところでの学びがあるが、似かよった韓国との交流は共通する課題を考えることに意義がある。生活様式、経済の状況など近いところでの交わりから気づく点も多いことを、交流会参加者から聞くことができた。今後の訪日については、流通面、残飯の有効活用や障害をもつ人が働いている農場の見学が希望としてだされ、今年9月の来日予定を確認した。

農村での滞在を終え、ソウルで一泊。夕方、町を歩き、日本と変わらない店の並びに複雑な思い。マクドナルド、ケンタッキーは言うに及ばず、ハーゲンダッツ、スターバックス等々。これもひとつの国際化。

6月□日

次年度の研修生選考のため北タイメーホンソン県へ。サワンさん(98年)と同じ村バンペーの4人の候補者からナロンデッサン(男・20才)を選ぶ。立ち会ってくれたのはアンボンさん(97年)、ポーディさん(99年)。近くの村に住んでいたブラチャクさん(98年)が結婚して、離れた村に移ってしまったため、孤軍奮闘のサワンさんと一緒に活動することを期待しての人選。「私が話をしてもなかなか村の人はわかってくれない」とサワンさん。息切れしないよう、少しづつがんばるよう助言。

人選の翌日、雨の中を車で2時間走り、ビルマ(ミャンマー)国境のメーサレッの難民キャンプへ。サルウィン川をはさんで向こう岸はビルマ。ここでの生活が長くなり、今さら

帰れない複雑な気持ちを住民から聞く。

6月△日

タイに続けて1年ぶりのビルマへ。今回は将来にむけて、方針を協議することが目的。研修生の帰った村タダインシェからティンアンウィンさん(92年)とトゥンティンさん(93年)がヤンゴンに出てきてくれ、一緒に今後の候補地としてエーヤワディー管区とカイン州の村を訪ねた。今回訪ねた村はどちらもカレン(ビルマではカインと表す)の人たちの村。タイで交流している村の人たちはスコカレンだが、ここはポーカレンと呼ばれる人たちと同じカレンだが言葉も風習も異なっている。



村での移動はボートで  
奥右ウィンさん、奥左トゥンティンさん

ビルマは未だ政情不安定なところがあるが、カイン州は中央政府に武装抵抗するカレン民族同盟(KNU)が活動する地域で、住民は政府軍と政府支持の民主カレン仏教軍(Democratic Karen Buddhist Army)、KNU軍の双方にふりまわされてきた。また主要産物の米の半分は政府に供出しなければならず、生活は厳しい。この村からタイ側国境の町メソトまで遠くなく、タイ側に出稼ぎに行く人も多いと聞いた。

今回の訪問をスタートに調査を重ね、新しい対象地が決まるのは早くても2003年ごろだろうか。

7月□日

この夏のスタディーツアーのひとつ目も兼ね、先月に続いてタイへ。帰国研修生のサンコムさん(89年)がNGOの職員としてスラムで活動しており、その見学で久しぶりにバンコクに。彼は数あるスラムの中でも国

鉄南部線周辺の人々のために働いている。線路周辺の不法占拠者と見なされている住民対象にセミナーを行ない、権利確保、交渉の仕方を学んでもらう、そして自らが権利を得ていくための支援活動が主で、食事や物資を配る手の活動ではない。

スラム訪問の後、バンコク市内の首相府の近くですわりこみをしている人々を訪ねる。サマッチャー・コンチョン(貧民連合)と呼ばれる人々が、世界銀行の融資によってできた東北タイ、ウボンラチャタニ県のパクムンダムの水門開放を求める抗議活動を7月12日から続けている。総勢は1600人程で、16日には流血事件、17日には200人の逮捕者もでていた。私たちが訪ねた折は昼下がりであり、緊迫した空気はあまり無かったが、ナベ、カマを持ちこんでの粘り強い村人たちの思いが伝わってきた。



サマッチャー・コンチョンの抗議看板

このダムへの融資について世銀の理事国である日本は賛成しているのだが、日本の新聞にこの抗議行動の記事はほとんどない。

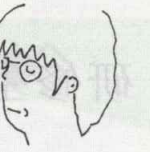
夜行列車でコンケンそしてバスを乗りついでカラシン県ナクーへ。現在研修中のノパドンさんに続く人を選考する。5人の候補者の中からケユンさん(男・28才)を選ぶ。この地域の私たちのカウンターパートはサイナワン新しい農業の会であるが、このメンバーを中心にしてSIFといわれる政府の補助金に申請し精米所を作ろうという動きがある。このSIFは世界銀行の融資によるプログラムであり、先のパクムンダムの件もあって、申請に反対する意見も村人の中にはある。東北タイの農民と世界銀行、これもまた、ひとつのグローバル化。

総主事代行 藤野達也

特別連載

“古参職員フジノに聞け!”

— 第3回「コマさんのイチゴ」の巻



さて、いよいよこのコーナーも話が佳境に入ってきました。今号では、これからのPHDが一体どのような方向に向かっていくのか、フジノさんの考えを聞いてみました。

編集部(以下編): 今日はPHDの今後の方向性についてお伺いしたいと思っています。ただ、PHDはいろんなことをやっているの、さて、何かから話してもらいましょうか。

フジノ(以下フ): じゃあ、まあ研修からですかね。

前回も少し触れたけれど、農業研修でいうと、昔は、米の収穫量を上げたり、多品目の野菜を作れるようになる、といった技術的なことが主な目標で良かったし、PHDとしてもそれが精一杯でした。

でも、次第にそれだけでいいのだからかと思うようになってきました。

編: そのきっかけになった良い例などありますか。

フ: 例えば、北タイ出身の農業研修生だったコマさん(5期生)は、帰国後イチゴの栽培を始めて大当たりしました。とにかく気候や土壌といった条件がイチゴに合ったんでしょう。

村をあげてイチゴの単一栽培に取り組むようになりました。そして、ジャムやヨーグルトの材料用に商社を通じて輸出され、数年の間はうまくいってました。

しかし最近では、はずれ年があったり、病気が発生したりで生産量が不安定になり、単一栽培による弊害が出てきています。

編: ふんふん。

フ: ここで考えたのは、PHDとしてどのようにこの地域に関わっていくべきなのか、ということでした。つまり、発生している病気に対して、その対応策を教えるだけがいいのか。それとも、村の将来の2~3歩先を見据えて、収入を安定させるためにも、多品目栽培の重要性を説くのか。

編: 難しい問題ですねー。

フ: あえて言うなら、前者は今まで多くの国際援助がそうであった対応の仕方だと思います。それに対して後者は、研修生たちに自分の村が外の世界(≒資本主義)とつながること

の良い面と悪い面を理解しておいてもらいたいという思いからです。

編: それって他の地域の活動にも言えることですね。例えば、カレンの女性による布のグループとか。

フ: そうだと思います。もう少しわかりやすく言うと、例えば村にアスファルトの道路ができるとする。そうすると、今までは行けなかった、あるいは行くのに1日かかっていた町の大きな病院へ簡単にいけるようになる。反面、いろんな物や情報が入ってくるようになるため、出稼ぎに安易に行くようになったり、物質主義にさらされるようになるかもしれない。

要するに、誰がその道路を作って、誰が一番得をするのか、といったあたりをPHDは研修生と一緒に考えていかないとダメだと思います。

ーいやはやフジノさん、話し出したら止まらなくなってきました。読者の皆さんがついてきていることを信じて、この連載はまだまだ続きそうな気配です。

▶ 私たちも応援団

— 評議員を訪ねて

今回は、PHDにも講師派遣などをご紹介くださっている、兵庫県社会福祉協議会(以下県社協)に小林良守事務局長をお訪ねしました。

この春に、県社協のボランティアセンターの名称が、市民活動センターへと変わりました。こうした動きは、当然、NPO法の成立を受けてのこと。しかし、根本的なきっかけは、やはり阪神淡路大震災だそうです。被災地で様々な活動を支援する

中で、様々なNGO、NPOとの付き合いが増え、活動の切り口が、福祉だけでなく「暮らしそのもの」へと広がったそうです。

人々の「暮らし」に焦点を当て、社会を良くしようとする時、様々な切り口からのアプローチが必要なのは、日本も発展途上地域も同じです。しかし、私たちはアジア・南太平洋地域と向き合う時、前提となる社会条件の違いに気付かされます。小林さんも、フィリピンの障害児を支援するグループに関わられて、ある意味日本が「豊か過ぎる」と感じられたそうです。自分たちの毎日を振り返る時に忘れたくないことだと思いながら、

お話を伺いました。

また、PHDに対しては、決して派手ではないが、一番大事な人づくりをコツコツとやっている点が素晴らしいとの評価をいただきました。ただし、それが「PHD」という名前だけでは伝わりづらい、もっと分かりやすくする必要があるのではとおっしゃられました。

より広い層の人々にPHDをアピールするためにも、県社協のネットワークをもっと使ってみてはと、ご提案いただき、こちらからも是非とお願いして、インタビューを終えました。



## 研修生レポート

(2000.5月下旬～8月中旬)

### アフダールさん

(インドネシア、男性、31才)

- 農業研修: 1. <神戸市西区> 渋谷富喜男  
2. <神崎郡市川町> 牛尾武博  
3. <神崎郡福崎町> 広岡史郎  
4. <朝来郡和田山町> 大森昌也  
5. <養父郡大屋町> 上垣春雄、上垣敏明

(敬称略)



渋谷さんと小松菜の収穫中

### ブンシー・ブチャレクライワンさん

(タイ、女性、20才)

1. <養父郡> 保育・保健衛生研修: 太陽保育園(八鹿町)、  
和田山町保健センター、養父町保健センター  
-滞在・アレンジ- 岸政次郎、今倉清  
2. <宍粟郡波賀町> 保育研修: 波賀みどり保育所  
洋裁・手芸研修: 柴原幸代、清水タケノ  
-滞在・アレンジ- 田中五郎、小林盛司、井原宏枝、山村雄彦  
3. <芦屋市> 洋裁・手芸研修: 芦田安紀子  
4. <篠山市> 洋裁・手芸・編物研修: 下吉富久子  
-滞在・アレンジ- 岩下富子、下吉富久子、柳田昌三・恵子  
5. <高砂市> 保健衛生・育児研修: 高砂保健所、高砂市保健センター  
-滞在・アレンジ- 神吉道子、樋野泰弘・素子  
6. <神戸市中央区> ぐらする一つ(国際協力ショップ) 見学

(敬称略)

20才という若さながら、山岳民族カレンの人々伝統の草木染めや機織りの技術を一通りマスターしているブンシーさん。11才の時から生まれ故郷のメーウロンノイ村でお母さんの指導を受けていたそうです。さらには、ランパン県にある職業訓練センターで半年間洋裁や保健衛生について学んだ経験を持っています。

そんな彼女の洋裁・手芸の腕前はなかなかのもので、特に飲み込みの早さが抜群です。初めて作るものであっても完成品と製図(説明図)を見ただけで一人で作ってしまいます。これからは、より細かい技術指導と「売れる」デザインに対するセンスを磨いていけるような研修を続けてい

## 夏本番! 夏バテ気味のアフダールさん。相変わらず食欲旺盛なリンダさん。 それぞれのペースで、それぞれの研修が進んでいます。

子どものころから親の農業を手伝ってきたというアフダールさんは、現在合計2haの土地(サトウキビ畑1ha、野菜畑0.5ha、水田0.5ha)で農業を営んでいます。タベ村での主な換金作物は、唐辛子とサトウキビから作る砂糖。それだけで現金収入が足りないときには、籐や竹でゴザなどを作り市場で売ったり、町へ出稼ぎに出て大工仕事などをすることもあります。トマトや赤玉ネギなど野菜作りに挑戦していますが、なかなかうまくいかないのが現状です。

そこでまず日本では、様々な野菜の作り方を中心に、良い土作りの方法、家畜の飼い方などを研修しています。

日本語の習得が早く、こちらの言っていることはかなり理解できるアフダールさん。農家によって違う堆肥の作り方やニワトリのエサの配合を逐一メモに取っています。というのも、「日本でいろいろなやり方を勉強して、タベ村でうまくいくやり方を考える時のヒントにしたい」から。例えば、西区の渋谷さんのところでは、ボカシ(嫌気性発酵肥料)に菜種油カスを入れますが、タベ村にはありません。そこで渋谷さんと考えたのが、サトウキビの砂糖を絞ったあとのカスが代りに使えるのではないかとということでした。こうした発想の有無が、日本での研修を有意義なものにするために大事になってくるでしょう。



ふくろうのぬいぐるみを作った

く予定です。

例えば、先日はハーバーサーカスにある国際協力ショップ「ぐらする一つ」を訪問しました。どんな商品があってどれが良く売れるのか、お店で売るためにはどれくらいの完成度が必要なのかなどをポイントにして見学させていただきました。ブンシーさんはカレンの布で作ってみたいと思うものをスケッチしていました。今後の研修へのよい刺激になったようでした。

もうひとつの研修の柱である保健衛生は、「話が難しくて頭が痛い」と言いながらもよく頑張っています。実際に離乳食や園児の昼食を調理できたことがとても参考になったそうです。「村のお母さんたちと一緒に、村にある材料でできるメニューを考えてみたい」と話しています。

### リンダ・アニスさん

(バブア・ニューギニア、女性、22才)

1. <氷上郡市島町> 農業研修: 橋本慎司  
2. <篠山市> 農業研修: 小前芳彦  
洋裁研修: 小前達子  
3. <篠山市> 保育研修: ドリーム国際保育園、ささやま保育園  
保健衛生・育児研修: 篠山市保健センター、  
丹南健康福祉センター  
洋裁研修: 河南すみ江  
-滞在・アレンジ- 岩下富子、谷田治、柳田昌三・恵子  
4. <高砂市> 洋裁研修: 河村恵子  
ステップハウス見学  
-滞在・アレンジ- 神吉道子、樋野泰弘・素子  
5. <神戸市西区> 食品加工研修: (株)尾崎食品 (敬称略)



赤ちゃんの訪問健診

### ノバドン・カヨムドッさん

(タイ、男性、24才)

- 農業研修: 1. <神戸市北区> 藤井誠次  
2. <氷上郡春日町> 中野宗嗣  
3. <氷上郡市島町> 一色作郎  
4. <神戸市西区> 渋谷雅弥  
5. <鳥取県日野郡> 笹間政典 (敬称略)

ノバドンさんの出身地域であるタイ東北部は、タイの中で最も貧しい地域にあたります。主な現金収入は雨季を利用して作るお米だけ。雨季が終わると水が不足し、水源に近い一部の人たちを除いて、ほとんどの村人は裏作もできません。こうしてこの地域では、タイ国内のみならず韓国、台湾、シンガポールなどへの出稼ぎが日常化しています。

村での農業は、すでに化学肥料に頼り切ったものになっています。村人たちはそれが土地や人間の体に良くないことを知りつつもなかなか離れられません。こうして日本での研修はボカシや堆肥作りといった良い土作りのための技術に重点を置きつつ、野菜を作る上での色々な工夫や家畜の飼い方を学んでいます。

例えば、酪農と農業の複合経営をされている中野さんの所では、牛糞が堆肥となり、土に帰り、おいしい作物がで

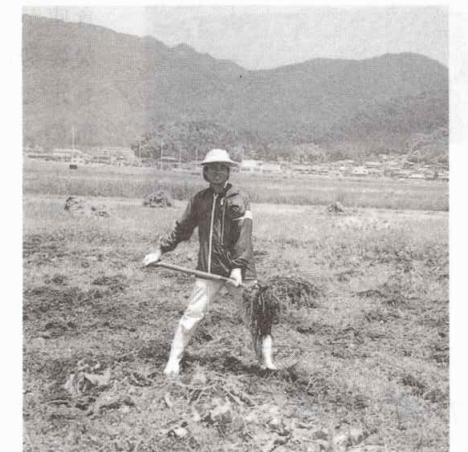
## ◆ 18期生 ◆

アンゴリ村での生活の中心は農業で、ヤムイモやタロイモといった主食の他にもサトウキビ、カカオ、ココナツなどを作っています。その他の野菜も色々作ってはいますが、量が少ないため自給用が精一杯です。

リンダさんの研修は、日本語が難しくてもある程度作業を通して理解することのできる農業研修からはじめました。鶏糞を使った堆肥作り、合鴨農法、マルチ(雑草を抑えるためにビニールなどを畝に敷くこと)などについて学びました。同時に、とれた野菜をどう調理するかも、一緒に食事を用意することで勉強できたようです。

また、リンダさんの村には、2ヶ月に一度、町からお医者さんが定期健診にやってきます。その時には、赤ちゃんの健診や育児相談のほか、村人たちに対して「食事の前は手を洗うように」だとか、「家の中はこまめに掃除するように」といった衛生面の話もあります。しかし、リンダさんによると、村人の多くがそういった話に無関心だそうです。

そこで篠山市では、保育園に行ったり、保健センター等で行われている育児や老人介護に関する教室やプログラムに参加させていただきました。保母さんの園児に対する接し方やきめの細かい育児指導やリハビリテーションプログラムがとても印象的だったようです。最近では、将来保健婦さんのような仕事につきたいと思うようになってきた、と話しています。



中野さんの畑に堆肥を入れるノバドンさん

き、それがまた牛へと帰っていくという一連の流れがよくわかったそうです。そして、「化学肥料を使わなくても立派な野菜やお米が取れることを村の人たちに伝えていきたい。そして“サイナワン新しい農業の会”(村の農民グループ)のメンバーがもっと増えてほしい。」と考えています。

また、村の問題のひとつに、農機具の修理をできる人が村に1人しかいないことがあります。そこで、秋から冬にかけての農閑期には、農機具修理の研修も行う予定です。ノバドンさんも、帰国後すぐに役立つ研修になるのではと期待しています。

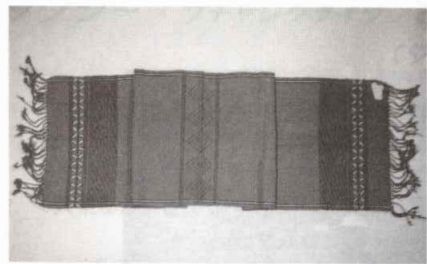




### ♪サンプル届きました♪

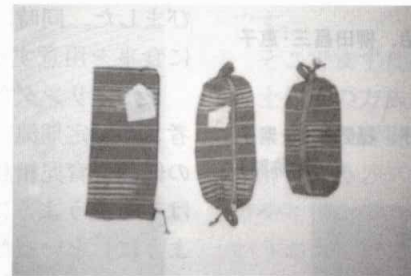
99年度の研修生、ポーディさんとベリポーさんが研修を終え日本から帰る時、「できるだけ早く試作品を作ってね」と送り出しました。そこで6月に職員がタイ出張に出かけた時に、ポーディさんからかばんや小物などの試作品を持ち帰ることができました。残念ながら、ベリポーさんには会うことができず、今回はポーディさんの報告のみとなります。

まずポーディさんの近況としては、日本から帰り3ヶ月の間に布を織る仲間と3回打ち合わせをしました。グループは大きくなりすぎたため、主力メンバーとそうでないメンバーのグループに分かれるそうです。ポーディさんはミシンを購入し、現在、布の倉庫を作りたいと考えています。



持ち帰った試作品について、早速ソディで話し合いを持ちました。試

作品はかばんやポーチ、小物入れなど合わせて14点ありました。意見としては、「糸の処理などまだまだ雑なところがあったり、布の使い方など改善の余地はありますが、日本で研修したことが活かされている」とのことでした。具体的に加工品について良いところ、または直す必要があるところを挙げ、実際に売れそうなものに関して年末のスタディツアーでの買いつけを考慮に入れ、早めの注文をしました。



日本で研修した技術が活かされた試作品を見て、ソディとしてとても感激、と同時に、グループの仲間とミーティングを開き、日本で勉強してきたことを村のグループの人に伝え始めている様子聞き、今後の動きに期待するところです。また、ミシンを購入したり、布を保管する倉庫がほしいという前向きな姿勢にソディのメンバーも元気づけられました。村の布のグループの自立とソディとの対等な関係という目標に向かい、布だけでなく布を使った加工品を売っていくという新たな段階に進



古本妃留美

### 『たかが10年 されど10年』

林業体験合宿「枝打」は、今年で10年目を迎えることとなりました。この10年間、ずっとご指導いただき財団法人大山振興会の方々、そして地元篠山市大山地区の皆さんに、あらためて感謝を申し上げたいと思います。

大山地区の方から、「一つの事を本気でやっている」と示すには、10年は続けなければならない。とりあえず

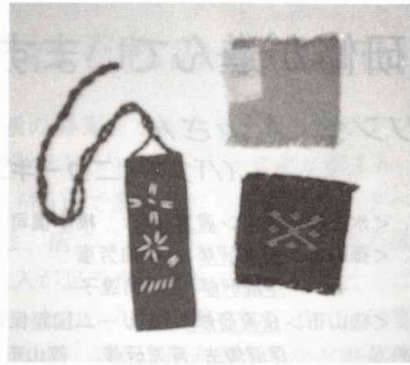
10年まではがんばりなさい。」とお言葉をいただき、私がプログラム担当を引き継いだのが7年目の時。一緒にプログラムを考え、進めるボランティアの方々には10年間ずっとお世話いただいている方もいらっしゃいます。これまでプログラムに関わられた方々の思い、重ねてきた時を感じながらここまでやってきました。

10年という、長い時間のようにすが、山の本々から見れば、ちょっとした時間にすぎません。長い間、コツコツと積み重ねてこられた山を守る努力、その一環に少しでも関わるこ

とで、私たちの暮らしと山、森の関係を、日本とアジア・南太平洋地域の現場に生きる人々の声を通して、これからも考えていきたいと思います。10周年を記念して10月下旬の土日に1泊2日のプログラムを予定しています。篠山市大山地区で、パパア・ニューギニアの研修生リンダさんと彼女の村の森林問題を中心に、日本とアジア・南太平洋地域の森林を考える予定です。興味のある方はPHD協会、伊藤までお問い合わせください。

伊藤公男

んだのではないのでしょうか。



今年の研修生のブンシーさんも同じ布のグループからの推薦で、布の加工を勉強しています。ポーディさんから出てきた試作品は彼女にとっても参考になったようです。ブンシーさんは手先が器用で、すでにかんりの技術を持っています。ブンシーさんの帰国後、2人でメーサリアンのグループを盛りたてていく予定です。そこでソディとしては、ポーディさん、ベリポーさんへの助言と注文、そして現在日本で研修をして

いるブンシーさんの研修が効果的になるように応援していくことが必要ではないかと思っています。カレンの布を使ってどのような加工品ができるのか、どのように加工すればカレンの布の特性を生かすことができるのか、また販売ルートなど、皆様からのアイデアを募集しています。

### 皆さんの学校・地域に PHD協会の

PHD協会では、スタッフが学校・地域・団体・グループなどを訪問して国際協力、当協会の活動、招いている研修生の村々の様子などについてお話をしています。6月にお話をさせていただいた神戸市立星和台中学校の2年生の皆さんからいただいた感想の中からいくつかをご紹介します。

「日本は自分の国・家族が良ければそれでいいとか確かに自分勝手だ。日本が良い国に、また人間が仲良くなるには、まわりの人との協力や、優しい心を持って外国の人々とも接する。そうすれば、国境は薄くなっていくのではと思う。」

「私がこれまで募金などをしてきた理由は、『日本のような国にしてあげたい』という思いからだだったが、日本

が幸せな国で、ネパールのような国が不幸だという考えは間違っていたように思う。」

「今日まではただお金をあげてそうすればそれで皆幸せになると思ってた。けど、お金をもらうとそのときは幸せになれるけど、お金がなくなると、もとのまた苦しい生活に戻ってしまうので、これからずっと幸せになれるように手助けしていったほうが良いと思った。私は間違ったことを思っていたので今日の話が聞いて本当によかった。」

「先進国の便利な生活の為に、発展途上国が迷惑を受けていることも分かり、自分も考え直そうと思った。」

PHD協会は教員の方々と共に、総合学習に向けての学校内部での取り組みの現状や課題、総合学習にPHD協会をどのように取り入れてもらうかについて話し合いをしています。皆様の学校・地域などでもPHD協会をぜひご活用下さい。

### PHD NEWS

#### □会費・ご寄附寄託状況

2000年 5月	72件	1,879,207円
6月	418件	2,669,308円
7月	351件	3,267,600円
8月	841件	7,816,115円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴しました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。

#### □ご寄贈ありがとうございます

去る7月13日、元町にある旭汽船株式会社様より、ロッカー等事務用品のご寄贈を受けました。また、神戸市シルバーカレッジ6期生のみなさんのご助力により無事、入れ替え作業を終えることができました。ありがとうございました。

少しきれいになった事務所にみなさんもおいでください。

#### □今年のNGO大学は10月開講

今年で14期を迎える国際理解・国際協力入門講座「関西NGO大学」(主催、関西NGO協議会)。10/7・8を皮切りに来年2月まで6回シリーズで。定員50人。問合せ、申し込み

は関西NGO大学事務局、電話06-6377-5144まで。

#### □今年インドのジョン先生から学ぶ

98年ローレンス先生(英国)99年ポール先生(インド)に続いて今年インド、オリッサ州にあるNGO「THREAD」の代表ジョン先生を招いて、社会変革の人材トレーニングプログラムを9月下旬から10月上旬に開催。詳細はお問合せを。

#### □外務省のNGO相談員に

この8月から来年3月まで、PHD協会は外務省の委託によりNGO相談員を引き受けることになりました。この制度はNGOの組織づくり、運営や活動地域の情報などNGOに関する照会にお答えするものです。

#### □東日本・西日本研修旅行のご案内

研修生のリーダーシップトレーニング、社会学習を目的とした研修旅行に今年も出かけます。各地で交流会を予定していますので、お近くの方には、また、ご案内致します。  
・東日本(11月下旬~12月上旬)  
予定コース：福井-愛知-岐阜-長野-山梨-東京-神奈川

### 〇月×日のPHD協会

職員 古本 夏の恒例行事「草の根生活塾」を担当。1泊2日3度の食事は研修生のお国料理。神戸の南京町で仕入れた材料でお味は上々。

職員 納堂 公用車で走行中、ボンという音と共に後方で白煙が。走行10万キロ超の車と納堂運転手の組み合わせは鬼門だそうで、廃車に。お疲れ様。

職員 芳田 古本さんとタッグを組んで神戸市内でお話の会。参加者のおひとりごとが、翌日終身維持会員に。準備と緊張のカイがありました。

職員 藤野 タイの村でだるくなりはじめ夕方すめられた地酒のせいかと思いきや、実は発熱。村人にももらったなぜかパブロン飲んで寝る。

職員 山西 国際協力ワークショップ(全4回)の各回でだしに緊張をほぐすゲームを担当。長年の青少年活動がここに生きる。

職員 伊藤 ロッカー、ソファをいただくことになり、ボランティアの方と汗だくの搬入作業。震災の傷が残る棚がやっと引退。お疲れ様。  
蚊によく刺される順

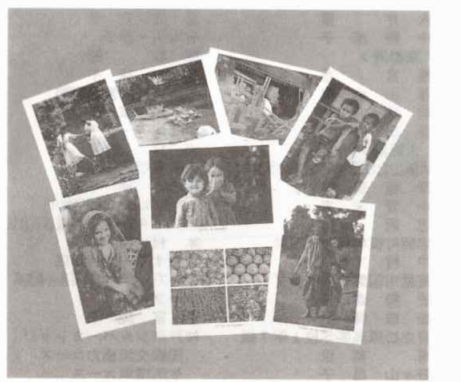
・西日本(1月中旬~下旬)  
予定コース：鹿児島-熊本-大分-福岡-山口-広島-愛媛-香川-岡山

#### □今年も年末タイ・ツアー

ブリチャー、アンボン、サワン、ポーディ、プラチャク、コマ、ベリポーさんの村を訪ねませんか。詳細は事務所までお問い合わせを。  
・訪問地：タイ北部 チェンマイ県・  
メーホンソン県のカレンの人々の村  
・日程：2000年12月23日~  
2001年1月2日(予定)  
・参加費：19万円 定員：13人

#### □新作絵ハガキまもなく完成

PHDオリジナルの新作絵ハガキが9月下旬に完成します。子どもの写真を中心とした8枚入りで500円です。乞うご期待!!







私は7月4日から1ヶ月間、神戸YMCA学院専門学校からの実習生としてPHD協会にきました。

私が初めてPHD協会を知ったのは、毎年4月にある企業訪問で、PHD協会

へ行った時でした。そしてそこで藤野さんの話を聞かせていただいたことがきっかけで、物資・資金援助以外に、自分の身の回りから始める国際協力があるということを知り、興味を持ちました。ちょうど7月に実習期間があるということが分かり、PHD協会を希望しました。

運よくワークショップにも参加させていただくことになり、ゲームを通して「自分の在り方」等を改めて考えさせら

れました。今まで国際協力とは、日常生活から遠くかけ離れたところにあるという感じていましたが、自分の身近なところにも深く関わっていることが分かりました。

実習期間が終了してもPHD協会に関わっていきたいと思っていますのでよろしくをお願いします。 宮内麻里

編集協力：井上由美江、中山佳昭

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。